

EUGEN(E) GEND(E)LIN

オイゲン・ゲンドリン (ユージン・ジェンドリン)

Translated by: Hiroki Sakuramoto, Tadayuki Murasato, Yoshihiko Morotomi, Kumie Osako, Yasuhiro Suetake, Satoko Tokumaru. 2011

翻訳：桜本洋樹、村里忠之、諸富祥彦、大迫久美恵、末武康弘、得丸智子 2011

ユージン・ジェンドリンは、レオニド・ゲンドリン（アメリカではレオ・ジェンドリンと名乗った）とシルビア・ゲンドリン-トベルの一人っ子として、1926年12月25日ウィーンに生まれた。母の父親はイゾンツォ川の治水に関わる主任エンジニアであった。父は1889年にロシアで生まれ、グラーツ大学の化学博士号を取った。母は1895年にトリエステで生まれている。家族はウィーン市第9区ロスアウワーレンデ25番地に住んでいた。ユージンはグリュエントールガッセにある「シューベルトシューレ」小学校に4年間通い、2年間はグラセルガッセにある連邦中学校に通った。どちらでも成績優秀であった。1938年のウィーン脱出の後で、家族はアメリカ合衆国ワシントンDCで新しい生活を始めた。20年後にユージン・ジェンドリンはシカゴ大学の哲学博士号を取得している。1958年から1963年までは、ウィスコンシン大学のウィスコンシン精神医学研究所の研究主任を務めている。1963年に、ユージン・T・ジェンドリンはシカゴ大学の行動科学部の准教授に就任した。



E. Gend(e)lin, etwa 1985

ジェンドリンは若き哲学者として、特にサルトルや、メルロ・ポンティ、フッサール、ディルタイの研究に取り組んだ。彼にとっては、経験の象徴化(Symbolisierung von Erfahrung)がいかんにして生じるのか、すなわち、思考と感情がそこから生じる基本的な過程が関心事となった。心理療法、特にカール・ロジャーズのクライエント中心療法に、自らの経験の場所を見出した。その領域で彼は、自らの理論的芽生えを臨床実践の中で検証することができた。そのようにしてジェンドリンは、カール・ロジャーズの教え子として、次いで共同研究者となり、最終的には後継者となったのである。

ジェンドリンは体験とその変容の包括的で現象学的ープロセスー志向の理論を発展させた（これを体験過程理論という）。心理療法の分野においてこの理論は、心理療法的な介入の成功・不成功は予測しうるものであるかという問題を導いた。多様な学派の心理療法の録音記録の実証的な評価は、次のことを示した。心理療法の成功のための唯一の重要な予測指標は、クライエントが自らの体験にどのように関わっているか、そのあり方によるのであるということを示したのである。肯定的な変容につながる、このような自己体験の様式をジェンドリンはフォーカシングと命名した。ジェンドリンは、フォーカシングのプロセスの個々の局面を記述した。そして、彼はこのフォーカシングのプロセスを生じさせ、

それに寄り添い、それを教えていく方法を開発した。

その後年月の経過において、ジェンドリンはパートナーと行うフォーカシングや、チェンジズ・グループのための効果的なセルフヘルプの方法、総合的な心理療法としてのフォーカシング・セラピーというものも開発した。ここにおいては、身体的な体験流（Erlebensflusses）に恣意的ではない仕方で注意を向けるような知覚のあり方や、これらの体験と内的なシンボルと外的な出来事の相互作用が重要な意味をもつようになった。それによってまた、硬直した態度と停止を現在の内的現実と共鳴させることが可能となった。

ジェンドリン独自の概念が最初に表現されたのは、1962年の彼の著作『体験過程と意味の創造』においてであった。1978年にフォーカシングの方法を具体的に示した著書、『フォーカシング』が出版され、8ヶ国語に翻訳された。ドイツ語版は1981年に出版されている。1986年に『夢とフォーカシング (Let Your Body Interpret Your Dreams)』が出版された。1987年に出版されたドイツ語版のタイトルは『あなたの身体はあなたの夢解釈者 (Dein Körper-Dein Traumdeuter)』であった。その他の多くの論文は様々な学術誌に掲載されたが、残念なことに、まだ著作として編纂されていない。1963年にジェンドリンは、学術誌『心理療法 その理論、研究、実践』を創刊した。これはアメリカ心理学会（APA）の心理療法部会のジャーナルであった。彼はこの雑誌の編集長を1976年まで務めた。ジェンドリンは1970年に、アメリカ心理学会の心理療法部会から第1回専門心理学者栄誉賞を授与された。

以下は、66歳のときのジェンドリンが、1938年ウィーンでの家族のナチスからの逃亡について、ドイツ語で語ったものを記述したものである。^{*1} ナチスがオーストリアに侵攻したその晩、私の父はとある集会のために出かけていた。帰宅してすぐに父は私たちに言った。「集会に向かう途中、赤-白-赤の旗が至るところで振られていた（訳者注：オーストリア国旗は赤-白-赤である）。窓という窓は、身を乗り出して『ロート-ヴァイス-ロート-ビス-イン-デン-トート！（オーストリアを死守するぞ！）』と叫ぶ人々でいっぱいだった。けれど集会所を出たときには、スワスチカ（訳者注：ナチスのシンボルである鍵



n Gend(e)lin, etwa 10 Jahre alt.

十字のこと）の旗が振られていた。すべての窓から、人々は『ハイル・ヒトラー！』と叫んでいた。彼らは同じ人たちののだろうか？」そんなはずはないだろう。二種類の人々がいたのだ。ヒトラーを望まない人々もたくさんいた。数日のうちに、ユダヤ人の家々に侵入し、戸外にあらゆる家財を投げ出した人々についての、たくさんのおそろしい話が耳に入ってきた。また、路上で殴打されたユダヤ人もいた。学校でもこうしたことが起こりかねなかった。そして私も、そうすることに加担したがるたくさんの人々を実際に目にした。

数日後、私の父は、母と私を五番街に住む祖父母の家に避難させた。ドアには小さなチェコの国旗が掲げられていた。私の祖父はプラハの生まれだった。1918年、チェコの君主制が崩壊したとき、祖父は自分がチェコの国民であったと通達された。一方的な通達に祖父は腹を立て、その怒

りは変わることがなかった。しかし、今やそれが幸いしたのだ。私の祖母は鍵がかかった部屋をいつもひとつ用意していた。それはドアの窓ガラス越しにしか中を覗き見ることができない部屋だった。その部屋は「サロン」と呼ばれ、アンティーク調の家具で飾られていた。ツヴァイク夫人のような特別な客人が来たときだけその部屋は使われた。シュテファン・ツヴァイク（訳者注：Stefan Zweig 1881-1942 ウィーンの作家・評論家。フロイトの精神分析に啓発された細やかな心理描写を特徴とする。『昨日の世界』の著者。1942年、ナチスに追われ亡命先のブラジルにて夫人とともに自殺）の母親は祖父母の友人だった。その応接室が私たちの寝室になった。何もかも変わってしまった。

やっとのことで三日後に父が合流した。父の店はすでに収奪され、父が築き上げたすべてのものは失われていた。父は泣いていた。それは考えられないことだった。また父は警察が自分を捜しているとも耳にしていた。だから父は三日間帰って来なかったのだ。父は私を長い散歩に連れ出し、その間たくさんのお話を語ってくれた。その業界では父が唯一のユダヤ人だったので、それを口実に父は店をすぐさま奪われてしまった。店を奪った人たちは、父を刑務所に入れたがってもした。「たくさんのお客さんが刑務所に入れられているんだ。ユダヤ人だというだけで」と父は説明した。父は私にそのことを明確に理解させておく必要があった。父は私に自分が犯罪者であるとは思ってほしくなかったのだろう（そんなことは考えるはずもなかったが）。父はまた外出の際には注意すること、例えばヒトラーの肖像を掲げている建物の付近には近づかないようにとも注意した。私は父の言うすべてのことをよく理解し家に戻った。そしてその場で父は直ちに逮捕された。母と私は刑務所へハミガキや下着を持って行かねばならなかった。父はずっと帰って来なかった。三ヶ月もの間。

他のユダヤ人たちも逮捕された。私は、祖父母の客たちが、刑務所に送られた人はきっと何かしらの悪いことをしたのだと言っているのを聞いた。私は、なぜ父が注意深く私に説明したのかを理解した。そのような大人たちは愚かであった。私は父のおかげで彼らよりも事情が分かっていた。何が本当なのかはすぐに明らかとなった。ほとんどすべてのユダヤ人成人男性が収監されてしまったのである。また別のことについても、私はその大人たちよりも多くのことを分かっていた。彼らは一体何が起きているのか理解できないと言っていた。彼らは愚かにも事態を把握できていなかったのだ。平時の秩序に慣れきっていた大人たちは今や途方に暮れていた。彼らは「一体どうしてこんなことが起こりうるのだろうか？」と言った。だけどそれは私には極めて単純であるように思えた。悪い連中が権力を握ったのだ。

あるとき、何人かの男が、祖父母と母と私のもとにやって来て、表のユダヤ人の大行列に加われと言った。多くの人々が「街灯の下に集まれ」と叫んでいた。そして私たちは、きちんと列を作って街を行進させられた。けれども結局、私たちは解放された。そして三ヶ月後、父が家に帰ってきた。すでに夏になっていた。私たちはまた一緒に住めるようになった。彼らが父を解放したのは、父が国外に出たいという書類にサインし、二度と帰って来ないと約束したからだった。それは奇妙なことであった。なぜなら、国外に出てしばらく戻らないということこそ、まさに私たちが望んでいたことであったからだ。当時はまさに様々な規制があった。どの役所も勝手に新しい規制を作ることを許されていた。それ以来、私はそのような契約を聞いたことがない。事実、数ヶ月後には、オランダからオー

ストリアに彼らが私たちを送還させようとした。私たちは恐怖に慄いた。

新たな困難が生じた。国外移住の許可証の入手が難しくなったのだ。許可証を得ようとすると色々な役所で、二十、三十もの書類が必要になった。役所では多くの人々が、昼夜を問わずビルの周りとともに道路に沿って長蛇の列をなした。父はそれと悟られないようにその書類の入ったブリーフ・ケースを私に持たせ、人にとられないようにした。私は父にどこでもついて行き、再び二人きりになるまでは、何かを尋ねたり言ったりせずにいるということを知覚した。国外移住の許可証を得ることは極めて難しくなっていた。私たちがそれを手に入れたのは数ヵ月後であった。その時すでに秋が訪れていた。

ようやく私たちは、どこに行くべきかという問題を考えることができるようになった。アルゼンチンに住む私の叔母とアメリカ合衆国に住む私の叔父が、私たち家族のためにビザを手配してくれようとしていた。けれどそれにはまだしばらくの時間を必要とした。父はすぐにでも移住したがっていた。それから数週間のうちに、私たちはナチス・ドイツを離れるいくつかの可能性があることを耳にした。ある人たちは、所持者がユダヤ人であると明記されていない古い型のパスポートを使って、チェコ共和国経由で脱出していた。その頃はまだ、国境検閲官は、ユダヤ人のための新しいタイプのパスポートについて、まだ何も知らされていなかったのだ。けれども今は、その方法は不可能になったのだ。キリスト教の洗礼証明書があれば、ユーゴスラビアへの脱出が可能だった。洗礼証明書は実際に洗礼を受けなくても買うことができた。けれどその日付は1920年以前のものである必要があった。「チェコやユーゴスラビアに行っても、きっと良いことはないだろう」と父は言った。ロンドンに五十ポンドを払ってくれる知人がいれば、リトアニアに行くこともできた。けれど私たちには、ロンドンに伝手はなかった。父は言った「私は東欧には行ったことがある。西へ行こう」。寝台列車でイタリアに行くという方法もあった。まとまった金をつかませて、誰にも知られずに国境を越えた者もいた。でも父は、それは十分には安全なやり方ではないと考えた。というのも、前に書いた誓約書のために、私たちが送還された場合には、父はただちに収監されるだろうからだ。一回で成功させねばならなかった。ウィーンで金をつかませていけば、スイスに家族で脱出することもできた。けれどそれも父にはまだ十分には安全ではないように思えたようだった。シュトラスブルクにおいても、ライン川を越えてフランスに逃してくれる人がいるようだった。でも父は「川の真ん中で置き去りにされたらどうする？」と考えた。もうひとつの選択肢はドイツに行くことだった。ケルンでベルギーの「住所」を売る人がいた。父はこの選択肢を選んだ。私たちはウィーンでケルンの「住所」を買った。ケルンではベルギーへ至る国境の森を抜けるためにさらにお金を払わなければならなかった。いまや私たちはついに脱出経路が決まったのだ。

私たちはとても小さなスーツケース一つだけを持って行った。いくつかの宝石が私のグリーンジャケットの裏側に縫い付けられた。タクシーが家の前の階下に待っていた。母と私は乗り込んだ。このタクシーの中で、私は記録帳に最初の記録をつけた。もう一度だけ、父は何か手紙が届いていないか確認しに行った。戻ってきた父の手には、アメリカ合衆国の親戚が送ってくれた青い宣誓供述書が入った青い郵便封筒が握られていた！（宣誓供述書はもちろんビザではない。ビザを得る手続きが公的に着手されたことを認める書類に過ぎない。けれど数ヵ月後、私たちがオランダで逮捕されたとき、その供述書を持っていたことが、私たち家族が本国に送還されない理由となった。）

私たちは列車に乗ってケルンに向かった。レーゲンスブルクで父は私のためにレモネードを買おうと席を外した。コンパートメントにはちょうど私と母だけで他には誰もいなかった。するとグレーのスーツを着た二人の男が入ってきた。彼らは身分証を見せて「私たちはゲシュタポだ」と言った。そして「ゲンデリン氏はどこだ？」と訊いた。知らない私たちは言った。列車が動き始めたので、二人の男は降りて行った。まもなく父がレモネードを買いに行っていた別の車両から戻ってきた。父はゲシュタポに会わずに済んだのだ。父は彼らが誰かも知らなかった。優しい父と母、いつも何でも与えようとした！そのレモネードが私たちを救ってくれたのだ。電車に乗っている間中、私たちはまだゲシュタポにおびえていたが、それ以上ゲシュタポがやって来ることはなかった。

ケルンで父は、私を連れて「その住所」に行った。それは、貧しい陰鬱な通りのユダヤ人居住区にあった。そこにはユダヤ人が淡々と住み続けていて、まるで何事も起こっていないかのような不思議な感覚を私たちにもたらした。このドイツ人はオーストリア人ほど粗暴 (wild) ではなかった。1933年からすでにユダヤ人たちは自らそこに住み続けていた。他方ウィーンにおいては、差し迫った命の危険があり、すべてのユダヤ人はすぐにもウィーンを離れたがっていた。私たちはちょうどその住所にあたる建物 (house) を見つけた。それはその建物の上階にある住居 (apartment) だった。そこで父は、ある男とともに部屋に入った。そして私はたぶん15分ほど外で待っていた。父が部屋から出てきたとき、青ざめた顔で「行こう」と言った。外に出てから父は、あの男は信用できないと私に説明した。自分のフィーリング (feelings) が自分に「ノー」と言うのだと言った。私はすでに、何度も父が「私は自分のフィーリングに従う」というのを聞いていた。けれど、このときはまだ、父が自分のフィーリングを信じるというのを、私は理解できなかった。私たちは見慣れぬ街の中で、何の出口も見出せずにいたのだ。私たちの希望のすべては、この「住所」にかかっていた。にもかかわらず、この希望は打ち砕かれてしまったのだ。父がただ、そう「感じた」という理由だけで。

私はそのとき大変驚いたので、後になって、自らに語りかけてくるフィーリングというものが一体どのようなものなのか、何度も自問した。時折私は、自分自身の内側に、そのようなフィーリングを見つけようと試みたが、見つけれなかった。けれど、私がそのフィーリングについて探求し始めたことが、結果的に実を結ぶこととなった。40年後、フォーカシングをどのように発見したのかと尋ねられたとき、私は、この少年の日を思い出したのである。

父は私を母がいるホテルに連れて行き、私たちを残して再び出かけて行った。そのホテルの部屋の窓からは、ケルン大聖堂の壁を間近に見られた。夕方になって父は戻ってきた。父は新しい「住所」を手に入れていた。次の日—それは土曜日だった—私たち一家はオランダとの国境に近い小さな村、ボルケンに移動した。オランダへ？それはウィーンでも手に入れられなかった唯一の国だ。ボルケンのとある一軒の家で、再び父は別の男と話をした。今回はこの会話の後父は「OK」のようだった。私たち家族はユダヤ教会へ出かけた。Maarev*2 (訳者注：夕方の祈り) を唱えよう！その日はサバト (訳者注：ユダヤ教の安息日) でローシュ・ハッシュャーナ (訳者注：ユダヤ暦の新年祭・秋分) の前日だった。国外へ脱出しようと思えしよともしないユダヤ人がいたことは、信じられない、恐ろしいことだった。翌日、私はこっそり、ボルケンの小さなペンションで出された朝食の詳細を記

録帳に書きつけた。父は何かを手に入れるためケルンに戻った。私にはそれが何のためなのかわからなかった。父がボルケンに戻ってきたとき、アムステルダム、ブリュッセル、そしてパリ行きの列車の切符を3枚持っていた。列車の切符だけ？私は列車の切符だけで私たち家族を受け入れてくれる国などないことをよくわかっていた。私たちは硬くて黄色の木製シートの小さな列車に乗ってボルケンを発った。車内にはわずかな人しかいなかった。列車は国境で停車し、私たちは下車した。もうひと組ユダヤ人一家が同乗していた。その一家も私たちと同様に、列車の切符しか持っていなかった。父は自分たちの家族が先だと主張して検問所に向かった。小さな建物の中に制服を着た男が長いテーブル越しに立っていた。検問所を通り抜けるには、テーブルと手すりの間でその男の検問を受けなければならなかった。私たち家族はその男に切符を見せた。男はそれを見てうなずき、切符を返した。私たち家族は検問を通り抜け、その小さな建物を後にした。

私の膝は震えていたが、歩くことができた。戻ってみると列車が停まっていた。もしかしたら先ほどと同じだったのかもしれない。ともかく、私たちはそれに乗り込み、列車は動き始めた。これでうまくいったらどうか？危機を脱したらどうか？「うまくいった」と記録帳に書き込めるだろうか？よくわからなかった。後で父は、私に「住所を世話してくれた男によると、日曜日の朝は、国境の検閲官はいつも教会へ礼拝に行き、代わりに立つ役人は事情をあまり知らず、切符しか持たない人でも国境を通過させてしまうそうだ」と教えてくれた。車内はほとんど空席だった。列車はヴィンテルスヴェイク村へガタガタと進んでいた。その村で、私たちは正規の列車に乗り換えた。今度の列車は満員だった。私たち家族は間違いなくオランダに入っていた。誰からも疑われることはなかった。私には理解できない言葉が耳に入ってきた。コンパートメントの窓側には太った男が座っていた。彼は間違いなくオランダ人であるように見えた。父はその男の向かいに座り、その隣に母、そして私が座った。

今なら記録帳に「私たちは自由だ」と書き込めるだろうか？まだだ。両親は押し黙り、何の目配せも発しなかった。彼らは私に目を向けることさえしなかった。だから私は、まだ自由になれたとは確信が持てなかったのである。列車は走り続けた。太ったオランダ人の男は箱から大きい葉巻を取り出し、それを父にすすめた。私は父がふだんは紙巻タバコを吸い、誕生日にだけ葉巻を吸うと決めているのを知っていた。けれど父は、差し出された葉巻を受け取り、それを吸うために吸い口を作った。そのとき私は、鞆から記録帳を取り出し、「うまくいった！」と書きつけた。その後、私たちはまたいくつかの列車を乗り継ぎ、アムステルダム行きの列車を待たなければならなかった。私は父になぜまだ安心でないのか尋ねた。すると父は、まだ国境に近く、いつでも列車を止めて私たちを逮捕し、車で送還することもできるからだと言った。私は父の言うことを信じられなかったが、そのことは私の記憶に残っている。

アムステルダムには、ユダヤ人が経営するエデンという名の小さなホテルが、運河沿いに建っていた。正面に通りはなく、水面だけが広がっていた。部屋には小さなバルコニーがあり、運河を一望することができた。白い鳥たちが大空を自由に飛んでいた。それはちょうど私たち家族のようであった。それ以来、カモメはいつも私にとって自由の象徴であり続けている。私は今でも、私の住むミシガン湖畔でカモメを眺めている。その日はローシュ・ハッシャーナのエルフェ（訳者注：前夜祭・イブ）であった。私たち家族はユダヤ

教会の所在を尋ね、そこに向かった。その教会は美しく荘厳であったが、中はとても暗かった。物がよく見えず、私たち家族にとって、そこで祈りを捧げている人たちはさながら異邦人 (alien) のようであった。現在になって、私はその教会が有名なポルトガル人のシナゴグであり、そこで祈っていた人たちがセファルディム (訳者注: スペイン、ポルトガル、イタリアなどの南欧諸国に 15 世紀前後に定住したユダヤ人) であったと知った。ナポレオンのような帽子を被った男たちが松明を持って佇んでいたが、それでも中はとても暗かった。三十分ほどして、私たちはその教会を出て、他にシナゴグがあるかを尋ねた。人々は私たちに「イエス」とだけ答えた。そこは少し遠いところにあった。中に入るとたくさんの人々でごったがえしていたが、後ろの方に座る場所を見つけた。そこは明るく、祈っている人々はアットホームな雰囲気であった。私たち家族は幸せだった。しばらくして人々はささやきはじめ、何人かの人々が私たちを見た。それはたぶん、私たちが新しくやってきた家族だったからだろうか? 人々は私たちのところにやって来て、私たちを前の方に導いてくれた。彼らは私たち家族のために、一番前の列を空けてくれたのだった。

*1 ここまでの翻訳は、『Korbei, Lore. (1994). Eugen(e) Gend(e)lin. In O. Frischenschlager (Hg.), *Wien, wo sonst! Die Entstehung der Psychoanalyse und ihrer Schulen*, pp.174-181. Wien/Köln/Weimar: Böhlau.』 pp.174-pp.176 line 2 をもとにしている。以下 pp.176 line2-pp.181 は、Elisabeth Zinschitz が英訳した非公式文書『Korbei, Lore. (2007). Eugene Gendlin. (Elisabeth Zinchitz, Trans.). Unpublished manuscript.(Original work published 1994) From http://www.focusing.org/gendlin/docs/gol_2181.html』をもとに、筆者らが和訳したものである。

なお、写真掲載については、E.Gendlin 本人から掲載許可をいただいた。

*2 「Maerev」(ドイツ語原著では「Maerew」) は、ヘブライ語表記「Maariv」(マアリブ) の誤記であろう。Maariv とは本来「夕方」の意であるが、ユダヤ教においては夕方に唱える祈り一式を意味し、ユダヤ教会でこの祈りを終えてから人々は帰宅する (Atsmaout Perlstein 私信、2011)。